

紹介

河合秀和著

『現代イギリス政治史研究』

本書は、まえがきにもあるように、一九世紀後半以降のイギリス政治史、特に一八六七年第二次選挙法改革に始まる大衆民主主義の展開を対象としている。筆者は日本現代史を学ぶものとして、イギリス現代史は全くの不勉強であるが、たまたま手にした本書に強い印象を受けたので、ここに紹介させていただく。

帝国主義時代の各国政治史は、激動する世界史との密接な関連で、それぞれの帝国主義成立・確立過程の特殊性・普遍性を具体的な歴史過程に即して総合的に把握しなければならぬが、日本の研究の現状では、経済史関係、特に各国の産業資本・金融資本成立史の研究が先行していて、これに比し独自の領域である政治史分野の研究はまだ劣勢なのではあるまいか？

紹介 こうしたなかで、本書は、イギリス近現

代についての一貫した歴史像と、帝国主義列強についての比較研究を深めるうえで積極的な役割を果すものと思われる。

ところで、イギリス史については、かつて堀江英一氏ら（堀江英一編『イギリス革命の研究』一九六二年）が、旧講座派理論や大塚史学を批判して、イギリス革命を「上からの革命」としてとらえ、イギリス資本主義、近代社会の形成過程を基準として日本の特殊性を定式化することに反対したことが思いだされるが、本書の著者の場合も、イギリス資本主義の発展をむしろ「例外的」存在とする考え方を前提とし、近・現代の政治過程もまた「上からの革命」過程として把握しているようである。

本書の政治史の方法は、イギリスの国内の階級対立の圧力が国家構造の中に吸収されていく過程と、またその国家構造の展開がイギリス外交政策とどのように連関していくのかについて、両者を統一的に把握叙述しようとするところにある。このような著者の方法は、帝国主義時代には、一国の国際政治が国内政治のたんなる外的条件に

とどまらず、国内の政治・社会的条件に相互に関係しあうという考え方にもとづくからであろう。

次に本書の構成を紹介すれば、序章 現代イギリスの国家構造、第一章 イギリス国家構造と帝国主義、第二章 イギリス社会主義の形成、第三章 イギリス帝国主義小論、第四章 第一次世界大戦とイギリス国家構造、第五章 戦間期イギリスの展望、第六章 三〇年代労働党の外交政策、終章 戦後イギリスの課題となっている。

各章は、別箇に発表された論文が大部分であるが、先に述べたような著者の方法が一貫しているため、本書はたんなる論文の寄せ集めにはなっておらず、一九世紀末から二〇世紀にかけての統一した歴史像を提示している。

ここでは、紙数の関係もあるので、各章についての説明をさげ、終章の結論的部分、「つまり、ある段階における急進主義は次の段階では体制の安定勢力に転化して、新たな急進主義の挑戦を受けることになった。他方、このような急進主義の前進はもちろ

んその時々、階級関係の中から生れていたが、同時にその前進の各段階において国際政治上の要因がきわめて重要な要因として作用していたことを見落すわけにはいかない」(二六一頁)とある点について、序章、一章、二章を中心に簡単に紹介しておきたい。

著者は、労働者階級の大部分に選挙権を与えた一八六七年の第二次選挙法がイギリス民主主義の転換点であるとし、またそれが自由主義的なウィング党によってではなく、トーリー党⇨保守党内閣ディズレーリ内閣によって実現されたことをめぐり、これまで正確な歴史評価がなされてこなかったことをあげ、敵対する党派間に共有されていたものこそ核心であると指摘する。なぜなら、階級支配の実態を明確に認識した支配階級は、むしろ六七年改革を選択することによって、階級対立を逆に支配安定の要素として国家構造の中に組みこみ、こうして社会的経済的要求を国家権力をかりて実現しようという観念を国民の中に注入し、他方で「国民的利益」の確保と称して、外

に帝国主義的取奪を仮借なく進めることが可能となったのである。一八七三年七月のディズレーリ水晶宮演説は、こうしたイギリスの帝国主義への方向転換の象徴であった。そして、イギリス労働者階級の多数は、「自由⇨労働」主義のもとに第一次大戦まで、自由党の影響下にくみこまれ、チェンバレン、ロイド・ジョージなど、後にイギリス帝国主義の代表者に変身していった自由党急進派の指導に従属し、再編成された支配構造の中に吸収されるというのである。以上極めて不充分で部分的な紹介であるが、著者のこのような帝国主義成立期のイギリス現代史の把握はドイツのH・ヴェーラーなどに代表される「社会的帝国主義」概念の歴史家の方法と共通性を有しているように思う。

筆者にとって興味深い点は、著者の帝国主義時代における民主主義の把握にある。一般に帝国主義の政治面については、「あらゆる分野での政治的反動⇨これが帝国主義の特性である」(レーニン『帝国主義と社会主義の分裂』)という特徴づけがなさ

れるが、著者は、「今日、民主主義の重要な制度的指標と見なされているものを実現し、そのことによって国家権力の作用を飛躍的に拡大し強化したことは、帝国主義時代の一つの政治的特徴であった」(河合秀和『ヨーロッパ帝国主義の成立』(岩波『世界歴史』22四八頁))と別のところでも述べているように、本書でも国家基盤の拡大としての民主的政治形態の実現を重視し、単純に帝国主義⇨あらゆる面での政治反動という見解(むしろその側面も押えているが)を踏襲してはいない。

このような観点は、日本史の場合、たとえば一九二五年に成立する護憲三派内閣の評価の際にも参考にすべきであろう。

他にも興味深い点が多々あるが、最後に筆者の感じた問題を若干記しておきたい。

まず、著者のいうイギリスの内政・外交を連結する国家構造の内容であるが、それが主として国民の政治的統合のありかたに重点がおかれ、権力構造としての官僚制に、軍部、地方自治体、さらに教育制度など、総体としての国家構造の問題の分析が充分

でないように思われること。

とくに「イギリスにおいては総司令官は依然女王に直屬して内閣の指揮下になく」

(七〇頁) という軍事力が、その後の帝國主義時代の展開のなかでどのように再編成されるのかは興味のあるところである。

第二に、経済と政治過程の単線的な結合はいましめなければならぬとしても、一九世紀末以降のイギリス資本主義の帝國主義的展開のなかで、ロスチャイルドなどソテイの金融資本家が国内政治、対外政策の面で果した暗幕的役割をもつと追求する必要があるのではなからうか。この点、入江節次郎氏『独占資本イギリス人の道』などの見解の方により魅力を感じるがどうであらうか。

以上、紹介というよりも乱暴な引用にすぎなかったが、本書がイギリス史専門家のみではなく、筆者のような専門外の多くの人々に読まれることをお薦めして筆をおく。

(B6判 二八五頁 一九七四年刊 岩波書店 一〇〇円)

(上野輝将・京都大学大学院学生)

紹介

紹

会 告

○ 佐伯富理事長の御退任にともない、五月十五日の理事会において、互選の結果、今津晃氏が新理事長に選出されました。また新理事に川勝義雄氏、新評議員に大山喬平、応地利明、間野英二の三氏が推薦されました。

さらに佐伯富氏は定年御退官になりましたので、規約により顧問に推薦されました。○ 編集委員はこれまで六人の方にお願しておりますが、編集業務が繁忙を極めていますため、新しく二人を増し、あわせて八人で編集にあたっていただくことになりました。現在の編集委員はつぎの方々です。

栄原永造男氏 (国史学)

藤井 譲治氏 (国史学)

大谷 敏夫氏 (東洋史学)

重松 伸司氏 (西南アジア史学)

芝川 治氏 (西洋史学)

尼川 創二氏 (現代史学)

高橋 誠一氏 (地理学)

岡内 三真氏 (考古学)

○ 日本歴史学協会の委員として、史学研究会から岸俊男氏と萩原淳平氏が選ばれました。